

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン神秘思想と騎士道物語：  
アマデイス、ロヨラ、サンタ・テレサ・デ・ヘスス  
を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 竜仁, Nomura, Ryuji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/594">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/594</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# スペイン神秘思想と騎士道物語

～アマデイス、ロヨラ、サンタ・テレサ・デ・ヘススを中心として～

野村 竜 仁

## 1. はじめに

『アマデイス・デ・ガウラ』を嚆矢とし、16世紀スペインで隆盛を示した騎士道物語は、その一方で批判の声も多かった。同時代の多くの知識人たちが騎士道物語に対して否定的な言葉を残しているが<sup>1</sup>、そのひとりであるマロン・デ・チャイデは、『マグダラのマリアの回心』で次のように述べている。

Y si a los que estudian y aprenden a ser cristianos en estos catecismos les preguntáis que por qué los leen y cuál es el fruto que sacan de su lección, responderos han que allí aprenden osadía y valor para las armas, crianza y cortesia para con las damas, fidelidad y verdad en sus tratos, y magnanimidad y nobleza de ánimo en perdonar a sus enemigos [...] Como si en la Sagrada Escritura y en los libros que los santos doctores han escrito faltaran puras verdades, sin ir a mendigar mentiras [...]

(これらを手本として学び、キリスト教徒になろうとしている者たちに、なぜそうした本を読むのか、どんな教訓を得ることができるのか、訊いてみるがいい。彼らはきっこう答えるであろう。戦いにのぞむための勇気と大胆さを学び、貴婦人に対する礼儀と礼節を学び、敵にも慈悲を垂れる心の広さと高貴さを学ぶことができる) [...] これでは、そうした絵空事に頼ることなく、聖書や聖なる博

1 Martín de Riquer, "Cervantes y la caballerisca", en *Suma Cervantina*, London, Tamesis Books Limited, 1973, pp. 280-281.

士たちが著したものに正真正銘の真実を見出すことができないかのようではないか)<sup>2</sup>  
(括弧内拙訳)

こうしたマロン・デ・チャイデの言葉を引きながら、スサナ・ヒル＝アルバレリヨスは、騎士道物語などの空想文学が、当時の宗教関係者たちにとって一つの脅威になっていたと指摘する。

Las críticas de Malón de Chaide contra los libros de caballerías se centran en el papel usurpador que tales libros habían adquirido. La literatura de ficción, y especialmente la de caballerías, por el éxito que ha alcanzado, ocupa ahora la función antes reservada exclusivamente a los libros religiosos difusores de la doctrina cristiana. Malón reivindica para la literatura religiosa la primacía que le corresponde, usurpada por la literatura de ficción.

(騎士道物語に対するマロン・デ・チャイデの批判は、それらの本が不当な形で手に入れた役割に向けられている。空想の文学、特に騎士道物語は、大きな成功を収めたことで、かつてはキリスト教の教義を普及させるための宗教的な書物にのみ許されていた役割を担うようになった。マロンが求めているのは、空想文学によってかすめ取られたものの、そうした優位性は宗教的な文学にこそふさわしいものであり、それを取り戻させることである。)<sup>3</sup>

(括弧内拙訳)

こうした批判からも分かるように、当時の宗教家には騎士道物語に親しんだ者も多かった。よく知られている例では、イエズス会の創始者イグナチオ・デ・ロヨラがいる。1521年、パンプローナでの闘いで負傷したロヨラは、療養中に読んだ聖人伝がきっかけで回心する。そして自伝でも述べているよう

---

2 Malón de Chaide, *La conversión de la Magdalena I*, Prólogo y notas del P. Félix García, Madrid, Editorial ESPASA-CALPE, 1959, pp. 27-28.

3 Susana Gil-Albarellos, *Amadís de Gaula y el género caballeresco en España*, Valladolid, Universidad de Valladolid, 1999, p. 189.

に、かつて読み耽った騎士道物語を念頭におきながら、宗教家としての道を歩み出している<sup>4</sup>。時代を下って、スペイン神秘思想を代表するサンタ・テレサ・デ・ヘススも、幼少の頃にやはり聖人伝を読み、異教徒の地で殉教する夢を膨らませていたが、その一方で騎士道物語を耽読し<sup>5</sup>、自らも騎士道物語をものしたことがあるという<sup>6</sup>。

二人の聖人は自戒を込めて騎士道物語に対する非難の言葉を残しているが、しかし宗教家としての道を歩みはじめる以前は、マロン・デ・チャイデが批判したような者たちと同じく、騎士道物語を読み、宗教的とも言える感動を味わっていたと考えられる。そうした読書体験が、のちの宗教活動に影響を及ぼしていた可能性は否定できないだろう。

本稿では、『アマデイス・デ・ガウラ』、イグナチオ・デ・ロヨラ、そしてサンタ・テレサ・デ・ヘススを中心に、スペイン神秘思想における騎士道物語的な要素について、考察を加えてみたい。

## 2. モンタルボ版の『アマデイス・デ・ガウラ』

マルティン・デ・リケールによれば、アマデイスに関する記述は14世紀の文献にまで遡ることができる<sup>7</sup>。現在流布しているアマデイスの物語は、1508年にガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボによって編纂された版がもとになっている。しかし物語自体はモンタルボ版以前に成立しており、20世紀になってからだが、アントニオ・ロドリゲス・モニノらによって15世紀のテキストが発見された<sup>8</sup>。この発見に先立ってマリア・ロサ・リダ・デ・マルキエルは、

4 イグナチオ・デ・ロヨラ、『ある巡礼者の物語 イグナチオ・デ・ロヨラ自叙伝』（門脇佳吉訳）、岩波書店、2005、p. 45.

5 Santa Teresa de Jesús, *Obras Completas*, Transcripción, introducciones y notas de Efrén de la Madre de Dios y Otger Steggink, Madrid, Biblioteca de Autores Cristianos, 1982, p.30.

6 Efrén de la Madre de Dios y Otger Steggink, *Tiempo y vida de Santa Teresa*, Madrid, Biblioteca de Autores Cristianos, 1968, p. 44.

7 Martín de Riquer, *Estudios sobre el Amadís de Gaula*, Barcelona, Sirmio, 1987, pp. 8-35.

8 Antonio Rodríguez-Moñino, 《El primer manuscrito del “Amadís de Gaula”》, *Boletín de la Real Academia Española*, XXXVI (1956), pp. 199-216.

原型となる物語がモンタルボ版とは異なる内容を含んでいた可能性について指摘しており<sup>9</sup>、さらにアバリエ＝アルセも原型の『アマデイス』とモンタルボ版との差異について詳細に検討している<sup>10</sup>。

『アマデイス』の基本的な筋は、フォルクローレなどに見られる貴種流離譚の定石に則ったものと言える。小ブリテンの王女エリセナとガウラの王ペリオンの間に生まれたアマデイスは、両親が結婚する以前に誕生したため、不義の子として川に流される。そのまま海に出て、そこで異国の騎士に拾われ、自らの素性を知ることなく成長する。やがて騎士として名を成し、異国の王であるリスアルテと戦って勝利を収め、その娘であるオリアナを妻とする。

こうした展開は原型の『アマデイス』でもモンタルボ版でも同じである。ただし原型の物語は、モンタルボ版よりも神話的な色合いが強く、凄惨なものであったと考えられている。たとえば原型では、アマデイス（一説では彼のいとこであるアグラヘス）がリスアルテと剣を交え、王を殺害する。さらにアマデイスの弟でありながらリスアルテに与したガラオールも、アマデイスとの戦いに敗れ、命を落とす。そして最後は、息子であるエスプランディアンが父であるアマデイスを殺す。親と子は互いの素性を知らず立ち合い、エスプランディアンが勝利する。夫であるアマデイスの死を知ったオリアナは、悲しみのあまり塔から身を投げ、自ら命を絶つ。アマデイスによる義父の殺害、また息子エスプランディアンによるアマデイスの殺害は、父とは知らずにライオスを殺すオイディプスのように、神話的な親殺しの物語を髣髴とさせる。

こうした神話的、フォルクローレ的な英雄譚であった『アマデイス』は、モンタルボの手によって趣の異なる作品となる。モンタルボ版でも、原型の『アマデイス』と同じくアマデイスとリスアルテとの確執は見られるが、し

9 María Rosa Lida de Malkiel, 《El desenlace del *Amadís primitivo*》, *Romance Philology*, VI (1952-1953), pp. 283-289.

10 Juan Bautista Avalle-Arce, *Amadís de Gaula: el primitivo y el de Montalvo*, México, Fondo de Cultura Económica, 1990.

かしアマデイスが直接リスアルテやガラオールと対峙したり、殺害したりするようなことはない。モンタルボの手によって、アマデイスは神話的な運命を生きる英雄から、ドン・キホーテも憧れた理想の騎士へと変貌する。思い姫であるオリアナへの愛を糧とし、弱きものを助ける回国の騎士となる。リスアルテと争うのは、正当な王位継承者であるオリアナを廃嫡し、ローマ皇帝に嫁すという義父の暴挙を正すためであり、戦いに際してもリスアルテを殺すようなことはない。またリスアルテが危機に瀕すれば、アマデイスは王の救援に駆けつける。

こうした改変は、キリスト教的な美德に基づいて物語を理想化し、併せて模範的な騎士像を提示するために行われたと考えられる。そこには、『アマデイス』の物語を当時の為政者であったカトリック両王の政策に適合させようとしたモンタルボの意図を見ることができる<sup>11</sup>。こうした傾向は、『アマデイス』の続編として書かれた『エスプランディアン<sup>11</sup>の偉業』において、より顕著になる。エスプランディアンが父であるアマデイスを超えるのは、騎士としての力量もさることながら、その志ゆえであると言えるだろう。エスプランディアンは、父の世代の騎士たちのようにキリスト教徒同士で争うことをよしとせず、その力を異教徒との戦いに結集するべきであると主張する。こうした十字軍的な理想を表明することは、現実の世界でレコンキスタを成し遂げたカトリック両王を賞賛することにつながり、さらにキリスト教世界にとって脅威となっていたイスラム教徒との戦いに向け、国威を発揚させる意図もあったと考えられる。このようにモンタルボの『アマデイス』には、護教的な主張を見ることができる。

### 3. アマデイスとロヨラ

こうした『アマデイス』の物語について、ヨランダ・ルシノビッチ・デ・

---

11 Susana Lidia Tarzibachi, "Sobre el autor y el narrador en 《Amadis de Gaula》", en *Amadis de Gaula (Estudios sobre narrativa caballeresca castellana en la primera mitad del siglo XVI)*, Kassel, Edition Reichenberger, 1992, pp. 24-25.

ソレはユングの理論などを援用しながら、そこに込められている象徴的な意味の読み解きを行っている。そしてアマデイスの冒険を、人間の内面的な成長に照応するものとして解釈する。<sup>12</sup>

モンタルボ版の『アマデイス』は、四つの書によって構成されている。第一の書で語られるのはアマデイスの誕生と騎士としての成長である。その過程において、アマデイスは両親と邂逅し、自らの素性を解き明かしてゆく。言うなれば、この書はアイデンティティの探求として読むことができる。次の第二の書で語られるインストラ・フィルメの冒険によって、アマデイスは愛するオリアナとの絆を確かめ、さらにこの島の領主としての地位を手に入れる。のちにアマデイスは、このインストラ・フィルメに宮廷を構え、諸侯を束ねる存在となるが、第二の書はそうした自己実現に向けての出発点、あるいはその啓示として見ることができるだろう。つづく第三の書で、アマデイスは怪物エンドウリアゴとの戦いをはじめ、数々の苦難に遭遇する。このエンドウリアゴについて、ヨランダ・ルシノビッチ・デ・ソレは、人間の心に潜む悪が具現化したものであり、そうした相手との戦いは、人間の内面的な葛藤を象徴していると述べている。<sup>13</sup>つまりこの書は、人間の悪しき欲望を克服する一種の苦行として解釈することができる。そして最後の第四の書において、アマデイスは最高の騎士としてオリアナとの婚礼にのぞみ、自らの理想を成就させる。

このように『アマデイス』は自己実現の物語として読むことができる。『アマデイス』の四つの書、言い換えれば四つの段階を経ての自己実現、自己省察は、ロヨラによって著された『霊操』の構成を思わせる。霊操は四週間にわたって行われる霊的な訓練であり、各週にそれぞれのテーマが定められている。第一週目は、被造物としての自己認識を目的としており、たとえばこの週に行われるべき第二霊操の第三要点では、自分が何者であるかを省

12 Yolanda Russinovich de Solé, 《El elemento mítico-simbólico en el *Amadis de Gaula*: interpretación de su significado》, THESAURVS, XXIX(1974), pp. 135-136.

13 *Ibid.*, pp. 133-134.

察するように指示されている。<sup>14</sup> つづく第二週目の目標は生路選定であり、これによって神の意思、つまり自らに課せられた使命を知る。さらに第三週目では自己放棄が求められ、苦悩するキリストと一体化することを目指す。そして最後の第四週目において、復活したキリストの力を全身で体感し、霊操を終える。このように『アマデイス』と『霊操』は、四つの段階を経て、ひとつの完成を目指す構造になっている。

この二つの書の類似点はそれだけではない。ロヨラの神秘思想について、ルイ・コニエが次のように述べている。

彼は神秘家と活動家という二人の人物を共存させている人間ではない。むしろ、一方であるからこそ他方であるといった人間だった。このような傾向によって彼は神秘主義のきわめて特殊な類型に属することになる。〈...〉この類型に属するのは、神との合一という最高の恩寵が知性と意志と感情とを同時に捉え、それが常に、少なくとも部分的には、行動規範と具体的実現という形に移し替えられるような人物たちである。<sup>15</sup>

『霊操』には、四週間の霊的訓練に続いて「愛に達するための観想」が追記されている。これは被造物に注がれる神の愛と、そこに内在する神の力を知覚するために行われる観想であるが、これによってロヨラは霊的な観想を身体的な活動へと昇華させようとする。神の愛はひとつの「活き」となって被造物に注がれ、被造物である人間はこの神の愛に応答しなければならない。ロヨラの特徴は、観想によって育まれた神への愛の帰結として活動を志向する点であり、そこが観想そのものを目的とするサン・ファン・デ・ラ・クルスなどとは対照的と言える。<sup>16</sup>

アマデイスも愛ゆえに活動を志向する。アマデイスの場合、愛の対象はオ

14 イグナチオ・デ・ロヨラ、『霊操』（門脇佳吉訳）、岩波書店、2004、p. 106.

15 ルイ・コニエ、『キリスト教神秘思想史3 近代の霊性』（上智大学中世思想研究所翻訳監修）、平凡社、1998年、p. 15.

16 同上.



リアナである。騎士道物語の英雄にとって思いを寄せる女性に欠かすことのできない存在であるが、その愛が英雄的行為に結びつくのはアマデイスの特徴である。同じ騎士道物語でも、『ティランテ・エル・ブランコ』では愛と冒険は必ずしも結びつくものではない。<sup>17</sup>あるいは『アマデイス』の第五の書として書かれた『エスプランディアン』の場合は、愛よりもキリスト教徒としての義務が優先している。<sup>18</sup>

アマデイスにとっては、オリアナへの愛と冒険は不可分な関係にある。どちらか一方が欠けても、アマデイスは英雄的な騎士となることができない。たとえばオリアナの不興を買ったアマデイスは、ベルテネブロスと名を変えて隠遁し、もはや英雄として冒険に赴くことはない。ロヨラにとって観想と活動が不可分なものであったように、アマデイスの場合もオリアナへの愛と冒険はひとつに結びついており、この二つがそろったとき、アマデイスは英雄的な騎士となる。

かつて騎士であったロヨラにも、宗教家としての道を歩みはじめる以前は、思いを寄せる高貴な女性がいた。戦闘で負傷した彼は、その女性への愛と、新たに生まれた宗教的情熱とを抱えながら、やがてこの二つを感情がもたらす差異に着目し、宗教の道を歩む決心をする。その直後、ロヨラの前に幼子イエスを抱いた聖母が現れ、最初の神秘体験に遭遇する。また自伝の第二章、つまり「世俗の騎士からキリストの騎士への変貌」と題された章では、聖母を侮蔑したモーロ人に対して激しい憤りを感じ、殺意を抱いた逸話が語られている。回心したばかりのロヨラにとって、聖母マリアは思いを捧げる対象に据えられていたのではないだろうか。モーロ人と別れたロヨラはモンセラートに赴いて総告解を行う。それからマンレサに移って苦行をするが、総告解を騎士の叙任式と結びつけて考えるなど、当時のロヨラが騎士道物語を念頭においていたことを考えれば、この苦行は、ドン・キホーテのシエラ・モレー

17 Susana Gil-Albarellos, *op. cit.*, p. 140.

18 José Amezcua, 《La oposición de Montalvo al mundo del *Amadis de Gaula*》, NRFH, XXI(1972), pp. 333-334.

ナと同じく、アマデイスなどの苦行をイメージしていた可能性もあるだろう。

もうひとつ、アマデイスとロヨラで共通しているのが、涙である。アマデイスもロヨラも、それぞれ敬愛するものの示顕を前にして涙を流している。たとえばアマデイスは、コンスタンティノーブルの皇帝の娘で、のちに息子エスプランディアンと結ばれるレオノリナに拝謁した際、若き日に見初めたオリアナの姿を思い出し、人目をはばからずに涙を流す。その涙もろさゆえに、『ドン・キホーテ』のニコラス親方からは「気どり屋」で「泣き虫」と評されている<sup>19</sup>。

ロヨラの場合も、神秘体験に際してサンタ・テレサ・デ・ヘススのように脱魂することはなく、涙が唯一の身体的な現象であった<sup>20</sup>。ロヨラの信仰生活においては三位一体が最高の地位を占めているが、マンレサでの苦行中、はじめて三位一体の神秘に遭遇して、涙を流している<sup>21</sup>。ロヨラは霊的な感情が高まるときに涙を流すのであり、こうしたロヨラと涙との関係は、晩年に著された『霊的日記』を見ても分かるように、生涯にわたって続いている<sup>22</sup>。

回心した当初、ロヨラが自らを騎士道物語の英雄と重ね合わせていたことは間違いないだろう。そうした英雄のイメージが、のちに霊操や、靈感にもなう涙といった形で、ロヨラの宗教活動に影響していた可能性がある。

#### 4. アマデイスとサンタ・テレサ・デ・ヘスス

既に述べたように、サンタ・テレサ・デ・ヘススは『自叙伝』の中で、修道女になる以前、母親などの影響で騎士道物語を愛好していたと述べている。テレサの著書は主なものが四つあり、『自叙伝』以外に、カルメル会の改革の歴史をつづった『創立史』、修道女たちに神への祈りを説いた『完徳の道』、

---

19 ミゲル・デ・セルバンテス、『新訳ドン・キホーテ[前篇]』（牛島信明訳）、岩波書店、1999年、p. 19.

20 田辺 董、『ロヨラのイグナチオの神秘体験』、南窓社、1986年、p. 32.

21 『ある巡礼者の物語』、*op. cit.*、p. 68.

22 San Ignacio de Loyola, *Obras Completas*, Transcripción, introducciones y notas de Ignacio Iparraguirre, Madrid, Biblioteca de Autores Cristianos, 1963, pp. 318-386.

そして「城」という比喩を用いて靈魂と神との合一を解説した『靈魂の城』を挙げることができる。それらはすべてテレサ自身の体験に根ざしたものであり、彼女の人となり、そしてその内面世界を知る手がかりとなる。

これらの書物から浮かび上がるテレサの生涯は、実際に武器を手にするとはなかったものの、戦いとしての側面を持っていたと考えられる。

Estando un día de la Trinidad en cierto monesterio en el coro y en arrobamiento, vi una gran contienda de demonios contra ángeles; yo no podía entender qué querria decir aquella visión. Antes de quince días se entendió bien en cierta contienda que acaeció entre gente de oración y muchos que no lo eran ...

(ある三位一体の日、修道院の聖歌隊席で恍惚状態になったとき、私は悪魔が天使と激しく争うのを見たのです。そのときはこの幻視が何を意味するのか分からなかったのですが、二週間も経たないうちに、祈りに専心する者たちと、そうでない多くの者たちとの間で争いが起きたのを見て、その意味を理解したのです)<sup>23</sup>

(括弧内拙訳)

テレサの著書は、もともと聴罪司祭の指示や、あるいは彼女を慕う修道女たちの要請に基づいて書かれたものである。つまり、読み手として修道女や、検閲を行うであろう聴罪司祭や高位聖職者を想定しており、一種の書簡と言えるだろう。特に『自叙伝』と『創立史』にはテレサ自身の生涯や、彼女が交流を持った聖職者や世俗の人間とのやり取りがつづられており、書簡形式であることと併せて、ピカレスク小説を連想することができる。しかしピカレスク小説の主人公が自らの機知だけを頼りに孤軍奮闘するのとは異なり、テレサの戦いには、アマデイスの場合と同じように、志を同じくする仲間たちがいる。幻視で見た「祈りに専心する者たち」こそ、そうした彼女の同志たちである。

---

23 Santa Teresa de Jesús, *op. cit.*, p. 139.

テレサにとって、潜心の祈り（*oración de recogimiento*）は神との合一にいたる道であり、信仰のおける武器と言っていいだろう。悪魔はテレサにこの祈りを放棄させようと誘惑する<sup>24</sup>。しかしドミニコ会士のビセンテ・バロンは、祈りを放棄しないように助言する<sup>25</sup>。また祈りに専心するためにテレサがより厳格で理想的な修道院の設立を目指したとき、世俗の人間だけでなく、彼女が属していたカルメル会の修道院からも多くの反対の声が上がる<sup>26</sup>。逆境の中、ドミニコ会士であったペドロ・イバニェスは、彼女の計画を支持し、協力を申し出る<sup>27</sup>。ビセンテ・バロンやペドロ・イバニェスのほか、やはりテレサの修道院を支援したガスパール・ダサやその友人であるフランシスコ・デ・サルセド、テレサが『自叙伝』の原稿を送ったガルシア・デ・トレドやドミンゴ・バニェス<sup>28</sup>、そして熱心な苦行と祈りによって世間の注目を集め、テレサも敬愛していたアルカンタラのペドロなども、テレサの同志と言えるだろう。さらに、将来において彼女の改革に賛同する者たち、つまり未来の同志について、テレサは予言とも取れる次のような幻視を得ている。

... estando en maitines en el coro, se me representaron y pusieron delante seis u siete, me parece serían de esta misma Orden, con espadas en las manos. Pienso que se da en esto a entender han de defender la fe; porque otra vez, estando en oración, se arrebató mi espíritu: parecióme estar en un gran campo adonde se combatían muchos, y estos de esta Orden peleaban con gran hervor. Tenían los rostros hermosos y muy encendidos, y echaban muchos en el suelo vencidos, otros matavan. Parecíame esta batalla contra los herejes.

（朝課のとき、聖歌隊席にいた私の前に、同じ修道会に属すると思われる6、7人の修道士たちが、剣を持って現れたのです。これは、彼らが信仰を守る者たち

24 *Ibid.*, p. 43.

25 *Ibid.*, p. 47.

26 *Ibid.*, p. 146.

27 *Ibid.*, pp. 146-147.

28 *Ibid.*, p. 78.

であることを意味していたのだと思います。というのも、別のときですが、祈りの中にあった私は脱魂の状態になり、どうやら大規模な戦闘が行われている戦場にいるようでした。そしてそこでは、この修道会の修道士たちが懸命に戦っていました。その顔は美しく輝き、多くの相手を打ち倒し、あるいは仕留めていました。それは異教徒に対する戦いであるように思われました。<sup>29</sup>)

(括弧内拙訳)

こうした同志の存在は、ピカレスク小説よりも騎士道物語的な要素として考えることができるだろう。さらに騎士道物語の場合、仲間以上に騎士に力を与えるのが、思い姫の存在である。先に述べたように、回心直後のロヨラにとっては、聖母がそうした位置に据えられていたと考えられる。そしてテレサの場合には、キリストがその役割を担っている。

Vime estando en oración, en un gran campo a solas, en rededor de mí mucha gente de diferentes maneras que me tenían rodeada; todas me parece tenían armas en las manos para ofenderme: unas, lanzas; otras, espadas; otras, dagas, y otras, estoques muy largos [...] Estando mi espíritu en esta aflicción, que no sabía qué me hacer, alcé los ojos a el cielo y vi a Cristo, no en el cielo, sino bien alto de mí en el aire, que tendía la mano hacia mí y desde allí me favorecía de manera, que yo no temía toda la otra gente, ni ellos, aunque querían, me podían hacer daño.

(祈りの中にいた私は、自分が広い戦場において、助けてくれる者もなく、周囲には私を取り囲むようにして、たくさんの人々がいるのを見ました。彼らは、どうやら私を傷つけるために全員が武器を手にしており、槍を構える者もいれば、剣とか、短剣とか、細身の長剣を持つ者もありました。[...] どうしたらいいか分からず、私の霊は悲しみに沈んでいましたが、しかし天に目を向けると、そこにキリストを見たのです。キリストは天ではなく、私の頭上高く、空中にありました。

---

29 *Ibid.*, p. 187.

そしてキリストは私の方に手を差し伸べ、そこから恩恵を授けてくれたのです。そのおかげで、私は周りのすべての者に対して恐れを抱くこともなく、また彼らがそうしようとしても、私に危害を加えることはできませんでした。<sup>30</sup>

(括弧内拙訳)

テレサは、聖俗を含めた現実の相手と戦うだけでなく、霊魂における霊的な戦いにも臨む。自らの生涯を語る『自叙伝』は、そうした内面的な戦いを主眼としたものであり、やがてこの霊的な戦いの記録が『霊魂の城』としてまとめられることになる。この『霊魂の城』で、テレサはキリスト教徒が現世的、身体的な誘惑に打ち勝ち、霊魂の城の一番奥にいるキリストとの合一を目指して克己することを説いている。

こうした霊魂を舞台とした戦いの比喩は、16世紀初頭のスペインで大きな人気を博したエラスムスの『キリスト教兵士必携』でも見ることができる。<sup>31</sup>しかしロヨラやテレサなどスペインの神秘思想家たちは、エラスムスと同じく信仰における内的な面を重視しながらも、外的とも言える人間の身体的な弱さを克服し、さらにそれを活動に向けて昇華させようとする。既に述べたように、ロヨラの神秘思想の特徴は観想だけでなく活動を志向する点にあり、テレサにもそうした傾向がある。<sup>32</sup>そこには、人間の霊魂だけでなく、身体も含めて救済を実現しようとするスペイン神秘思想の特徴を見ることができるだろう。<sup>33</sup>

身体的な要素を一律に排除するのではなく、それらを統合する形で救済しようとするスペイン神秘思想の特徴は、騎士道物語である『アマデイス』からも読み取ることができる。ヨランダ・ルシノビッチ・デ・ソレによれば、アマデイスの敵で、魔術を駆使するアルカラウスは、人間の権力欲を象徴し

30 *Ibid.*, pp. 181-182.

31 Erasmo, *El Enquiridion o manual del caballero cristiano*, Ed. de Dámaso Alonso, Madrid, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1971, pp. 184-192.

32 前掲ルイ・コニエ, p. 14.

33 拙稿『スペインにおけるエラスミスモの受容とそのスペイン化に関する考察』, 神戸外大論叢, 第56巻第5号, 2005年, pp. 99-117.

ている。<sup>34</sup> アルカラウスは悪魔的というよりも、欲望に駆られ、不正な手段を用いてでもその目的を達成しようとする人間的な弱さを具現化した存在である。このアルカラウスを倒すことは、そうした欲望を克服する行為となる。同じような人間的な弱さは、王であるリスアルテにも見ることができる。最初はアマデイスを重用し、のちに対立することになるリスアルテは、権力者としての傲慢の罪に堕している。アマデイスに嫉妬した廷臣が他国の騎士を取り立てることは国益に反すると中傷し、彼らの甘言に乗せられたリスアルテは、アマデイスを遠ざけ、やがてこれが両者の対立へとつながってゆく。またリスアルテの娘オリアナも、些細な行き違いからアマデイスの愛に疑いを抱き、根拠のない嫉妬に駆られて彼を叱責する。アマデイスは騎士として戦い、あるいはベルテネブロスとして苦行することで、リスアルテとの不和やオリアナの嫉妬を克服する。

こうしたアマデイスの英雄としての特徴を、ヨランダ・ルシノビッチ・デ・ソレは次のように述べている。

La imagen de la perfección heroica no reside en su perfección cristiana conforme a la ortodoxia medieval estricta, la victoria de Logos a expensas de Eros, sino en la reconciliación armónica de la humanidad total, corpóreo-espiritual, del hombre. Para el héroe la plenitud mundana y la integridad interna no son alternativas excluyentes. Lo espiritual, a través de él, no se yergue únicamente hacia la esfera celestial, sino que infunde y abarca lo terrenal a la vez.

(完璧な英雄としてのイメージを形作るのは、厳格で中世的な正統性に則したキリスト教徒の完璧さ、つまりエロスを犠牲にしたロゴスの勝利ではなく、人間性全体を、つまり人間の霊と身体を調和させる形での和解である。英雄にとって、世俗における栄光と内面的な完璧さは、排他的な二者択一を迫られるものではな

---

34 Yolanda Russinovich de Solé, *op. cit.*, pp. 144-145.

い。靈的なものは、英雄を介して、天上の領域をひたすら目指すのではなく、現世的なものへの関心と呼び覚まし、同時に現世的なものを自分の中に取り込むのである。)

(括弧内拙訳)<sup>35</sup>

アマデイスによる靈的な領域と現世的な領域の結合は、スペイン神秘思想の理想を思わせるものである。エスプランディアンのような十字軍的な理想を体現するわけではないが、最高の騎士として苦闘するアマデイスの姿は、ロヨラなど神秘思想家たちが掲げるキリスト教徒の理想像として解釈することができるのではないだろうか。

## 5. むすび

アマデイスの息子エスプランディアンは、モンタルボによる編纂以前の原型の『アマデイス』にも登場している。しかしこのエスプランディアンの活躍を描いた『エスプランディアンの偉業』は、モンタルボの創作によるところが大きい。カトリック両王の治世を背景とし、モンタルボによってキリスト教化された『アマデイス』の物語は、この『エスプランディアン』において完成する。レコンキスタを完了し、新大陸へと乗り出してゆくスペインにおいて、モンタルボによる『アマデイス』のキリスト教化は、十字軍的な性格を持つものであった。

騎士道物語が人気を博していた時代、多くの者が海を越えて新大陸を目指した。彼らの脳裏には、アマデイスたちの活躍が刻まれていた。<sup>36</sup>たとえば、カリフォルニアという地名は『エスプランディアン』に登場する架空の土地の名前に由来すると言われる。やがてカリフォルニアと名づけられた土地は、ロヨラの創設したイエズス会が中心となって、キリスト教化されてゆく。<sup>37</sup>

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 167.

<sup>36</sup> Juan Bautista Avallé-Arce, *op. cit.*, p. 51.

<sup>37</sup> ウィリアム・V・バンガート, 『イエズス会の歴史』(岡安喜代・村井則夫訳, 上智大学中世思想研究所監修), 原書房, 2004年, pp. 423-425.



このイエズス会と不可分な関係にあるスペイン・カトリックについて、オクタビオ・パスは次のように述べている。

スペイン・カトリックとイギリス・プロテスタントの態度の違いを二つの単語に要約し得るとすれば、スペインの態度は《包括型》、イギリスのそれは《排他型》ということになるだろう。前者の場合、征服と支配の概念は改宗と吸収の概念に結びついている。<sup>38</sup>

対抗宗教改革を主導したイエズス会にも、やはりそうした《包括型》のカトリック的な性格を見ることができる。つまり他者を排除するのではなく、吸収し統合しようとする。これを人間の内面において実践しようとしたのが、霊操と言えるだろう。人間が自分自身のうちに抱えている他者、つまり身体的なものを排除するのではなく、吸収し統合しようとする。靈魂と身体の両方を救済しようとするスペイン神秘思想には、スペインによって行われた《包括型》の征服と共通する性質を見ることができるのではないだろうか。

本稿で検討したように、モンタルボによってキリスト教化された『アマデイス』とスペイン神秘思想の間には、いくつかの共通項を見出すことができる。そして『アマデイス』の物語には、《包括型》の征服を志向した当時のスペインの思想が影響していた可能性がある。こうした騎士道物語とスペイン神秘思想の関連性について、機会を改め、さらに詳細に検討してみたい。

---

38 オクタビオ・パス、『くもり空』（井上義一・飯島みどり訳）、現代企画室、1991年、p. 176.